「牛が教えてくれたこと」

豊留　にこ

　みなさんは、本当の幸せって何だと思いますか。

　私は、「牛と人を幸せにする酪農をしたい！」キラキラ目を輝かせて酪農部に入った。私がそう思ったのはある一冊の本がきっかけだった。山地酪農家、中洞正さんの本だ。中洞さんは岩手で酪農をしている。その酪農の形態はとても珍しい。なんと24時間３６５日完全放牧だ。また、自然交配、自然分娩。ずっと山に放牧していて朝と夕方の搾乳の時だけ牛舎の下りてくる。全て牛まかせの酪農だ。そんな牛たちの姿は、野生の牛そっくり。ノビノビしていてスキップしているように見えた。表情も柔らかくて、幸せそうだ。牛が本来あるべき姿がそこにはあった。「牛が幸せになると、その牛乳を飲む人間も幸せになる。」と、中洞さんは本の中でそう言っていた。牛が大好きで、酪農にも興味がある私が、そんな山地酪農に魅力を感じない訳が無かった。私は中洞さんに似たような酪農をしたくて酪農部に入った。しかし、愛農の酪農は、私の思い描いていた理想とは全然違った。私は狭くて古くて臭い牛舎に繋がれている牛を可哀想だと思った。牛を見るのが辛かった。ずっとそう思いながら日々の実習や管理をしていた。だからあまり楽しくなかった。それから約１ヶ月。仕事にも慣れ始め少し余裕が出てきたある日、私は牛の大きくて綺麗な瞳を見つめながら対話をしていた。すると、その牛の表情が柔らかくて幸せそうなことに気が付いた。信じられなくて、他の牛の顔も見て回った。でも、やっぱり幸せそうな顔をしながら口をモグモグさせていた。私は、「こんな所で人の都合の為にずっと繋がれているのに何で幸せそうなん？」と訳が分からなくなってしまった。でも、よく考えてみると愛農の牛たちは幸せなのかもしれないと思った。なぜなら酪農部の職員や部員は牛たちを家族の一員のように愛おしく思い、大切にしているからだ。規模が小さくて設備も建物もボロボロだけど、牛に対する愛情はどこの酪農家にも負けていない。私は、山地酪農や放牧でしか、牛は幸せになれないと思い込んでいた。また、山地酪農や放牧さえしておけば、牛は幸せなんだと思っていた。そこまで気が付いて呆然としていると牛の尻尾が私の顔面を直撃した。「失礼だモ～」と言われているような気がした。確かに失礼極まりないと思う。勝手に人間の都合で育てられ、人間の都合で牛舎に繋がれ、ミルクを搾られているのに、その人間が、それを可哀想だと言う。可哀想と言うのなら最初からしなければいい。でも、牛乳や乳製品は私たちにとって欠かせない産物だ。牛にとっての本当の幸せは、酪農のやり方云々だけではないと思った。確かに、中洞さんのような山地酪農や放牧酪農が牛にとってはベストなのかもしれない。ただ、金銭的、土地的な理由などで、それが不可能だとしても、それに比例して牛の幸せが減るわけではない。それは酪農家次第だと思う。私は山地酪農や放牧酪農という言葉だけに捕らわれ過ぎていて、牛にとっての本当の意味での幸せを見失っていた。

　これは自分自身のことでも言える。私は、これまで何をしても何を手に入れても、満たされない、何か虚しいと感じることが多かった。その上それを人や環境のせいにして、自分にいつも注がれている家族や友達からの愛情、すなわち私にとっての小さくて一番身近な本当の幸せに気づけていなかった。こんな大切なことを牛は私に教えてくれた。そのことに気が付いてから実習や管理でうしと一緒に過ごすことが幸せでしょうがなくなった。

私が実習などの中で幸せを感じる瞬間はたくさんあって絞り切れないけれど、一つは搾乳中の空き時間に、牛を観察することだ。当然、牛は人と同じで一頭一頭性格が全く違う。搾乳中、じっと前を向いて静かにしている牛もいれば、嫌がってちょっとイライラして蹴ってくる牛もいる。かと思えば、ミルカーが付いていることをまるで気にも留めず隣の牛の餌をすごい勢いで奪い取ってドヤ顔の牛もいる。その横で滑ってずっこけているちょっと鈍臭い牛もいる。こんな牛の日常を見るのが私は好きだ。牛が幸せそうにしていると私も幸せになる。中洞さんの言葉を身を持って少しは理解できたと思う。

　I HAVE A DREAM.　私は将来、自分が愛する土地で愛する人と動物と植物、たくさんの命に囲まれながら些細な幸せを大切に小さく、でも頑丈な暮らしをしていきたい。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　END